

スペイン語直説法現在形の「同時性」とは何か

山村, ひろみ

九州大学大学院言語文化研究院言語環境学部門 : 教授 : 言語情報学

<https://doi.org/10.15017/25664>

出版情報 : 言語文化論究. 29, pp. 47-68, 2012-10-24. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :



スペイン語直説法現在形の「同時性」とは何か

山 村 ひろみ

0. はじめに

スペイン語の直説法現在形 (presente、以下、現在形とする) は、当該事態が発話時と同時的關係にあることを示す時制形式であると説明されるのが一般的である¹。しかしながら、Fernández Ramírez (1986: 212) も言うように、いわゆる現在形が示す発話時との「同時性」というのはいわばフィクションである。というのも、現在形で表出された事態が物理的に発話時と同時的關係を持つことは、実際には不可能だからである。例えば、以下の時刻表現である。

(1) Ahora son las ocho de la mañana en punto. 今午前8時ちょうどだ²。

(1) は発話時の時刻を表したものであるが、この文の意味するところと「発話時」の關係を考へてみるならば、「言語的時間 (tiempo lingüístico)」において想定される「発話時」と現在形が示す事態の「同時性」は「物理的時間 (tiempo físico)」における「同時性」とは相容れないものであることが分かる。厳密に「物理的時間」に即して考へるならば、話し手が(1)の文を構成する語を発するたびに、その「発話時」は時間軸を移動し、全文を発話し終わったときにはすでに「午前8時ちょうど」ではなくなるからである。また、対象を「言語的時間」に限っても、現在形に想定される発話時との「同時性」は問題である。スペイン語の現在形には過去の事態に言及する「歴史的現在」と呼ばれる用法、また、mañana (明日) のような未来時に言及する副詞と共に起して未来の事態を示す「未来の現在」と呼ばれる用法があるからである。

このように、スペイン語の現在形は必ずしも「発話時」と同時的關係にある事態を表すわけではない。それにも拘らず、これまでスペイン語の現在形の機能として一貫して発話時と当該事態の「同時性」が主張されてきたのはなぜなのか。そもそも現在形の「同時性」とはどういうものなのか。本稿は、この問いに対する回答を、まず、先行研究で主張されてきたスペイン語現在形の「同時性」は、現在形の様々な用法に共通して見られる意味特徴を包括した機能を表したものと捉えた上で、現在形によって表出される命題と現在形によって表出された当該文が示す意味特徴の關係という観点から考へていく³。

1. スペイン語における言語外現実の言語化と時制の關係

本節では、「同時性」によって示されるスペイン語の現在形の機能を考へる前に、まず、本稿におけるスペイン語の動詞時制の解釈を述べておきたい。

一般に、スペイン語の tiempo (時制) は直示的、指示的なカテゴリーであり、ちょうど話し手がその遠近感をもとに人やモノを定位するのと同じく、事態を「発話時」に関係づけながら localizar (定位) するものであると解釈されている⁴。しかし、山村 (2011) が明らかにしたように、スペイン語の動詞時制形式の振る舞いを詳細に観察するならば、スペイン語の時制は「発話時」を基準にするものと「非発話時」を基準にするものに大別されることが分かる。言い換えるならば、スペイン語の時制は必ずしも発話時基準ではないということである⁵。

また、スペイン語の時制には、同じ動詞であっても、その動詞が出現する命題内容によって、それを表出する時制形式に制限があるという特徴がある。次の例を見られたい。

- (2) a. Cuando yo ?? fui (ps.) niño, ... 私がこどもだったとき、...
 b. Cuando yo era (imp.) niño, ... 私がこどもだったとき、...
 (3) Yo también fui (ps.) / era (imp.) niño. 私もこどもだった。

(2) と (3) は [yo ser niño (私がこどもであること)] という命題を過去の時制で表出したものであるが、cuando (～する時) という時の接続詞に導かれた副詞節においては、(2a) のようにコピュラ動詞 ser の直説法線過去形 (imp.) で表出するのが一般的で、(2b) が示すように、同じ ser の直説法点過去形 (ps.) による表出は不自然になる。一方、(3) は同じ [yo ser niño (私がこどもであること)] という命題に también (～また) という副詞が付加されたものであるが、この場合は線過去形と点過去形のどちらでも表出可能だが、出現頻度としては点過去形が線過去形を圧倒する⁶。このようなコピュラ動詞に見られる時制形式の振る舞いは、スペイン語の時制が単に当該命題を時間軸上に「定位」させるものではないことを示唆する。なぜなら、[yo ser niño (私がこどもであること)] という命題の意味内容は発話時より前に「定位」されることが明らかであるにも拘らず、その表出は当該命題が出現する環境によって - cuando に導かれた副詞節か、副詞 también との共起か - 点過去形か線過去形のどちら一方に偏るからである。確かに、この偏りを、時制ではなく、「完了」/「未完了」といった点過去形と線過去形の間で想定されるアスペクトの対立に帰する解釈もあろう。しかし、[yo ser niño (私がこどもであること)] という命題の意味内容は発話時から見れば明らかに「完了」したものであり、そこに「完了」対「未完了」という対立を見るのは難しい。一方、スペイン語の時制は、「歴史的現在」、「未来に言及する現在」以外の例を見ても、言語外現実をそのまま時間軸に反映させたものとは言えない。以下の例を見られたい。

- (4) a. Por poco me desmayo. 私はもう少しで気絶するところだった。
 b. Casi me desmayo/me desmayé (ps.) 私はほとんど気絶するところだった。
 c. Estuve (ps.) a punto de desmayarme. 私はまさに気絶するところだった。

(4) の例は、その日本語訳に明らかなように、いずれも「私が気を失いかけた」という同一の過去の事実を言語化したものである。しかし、その同一の言語外事実を言語化した文の時制を見ると、現在形 (pres.) と点過去形 (ps.) という相反する時制が出現していることが分かる。

山村 (2009) が指摘したように、過去の未遂に終わった出来事を副詞句 por poco を用いて言語化する際には、(4a) のように現在形しか用いられない。一方、同じ未遂の出来事を副詞 casi (ほとんど) を用いて表出する際には、(4b) が示すように、現在形になることもあれば点過去形になることもある。また、その未遂の出来事を “estar a punto de+不定詞 (まさに～するところである)” という迂言

形式を用いて言語化する場合には、点過去形が用いられることが多い⁷。以上のことは、スペイン語において言語外現実がどのような時制によって表出されるかは、それを言語化する際に選択される命題のあり方に左右されることを示したものである。本稿は、このようなスペイン語の時制の特徴を踏まえ、スペイン語における言語外現実の言語化と時制の関係を次のようなプロセスとして捉える。なお、以下では、言語化される言語外現実の例として前述の「私が気を失いかけた」という過去の未遂の出来事を用いている。

(5) スペイン語における言語外現実の言語化のプロセス：

i. 話し手による言語外現実の認知

ii. 言語外現実の言語化のための命題の選択

[por poco yo desmayarme], [yo casi desmayarme], [yo estar a punto de desmayarme], etc.

iii. 選択された命題の時制化の可能性

[por poco yo desmayarme]: PRES./*PS. [por poco yo desmayarme]

[yo casi desmayarme]: PRES./PS. [yo casi desmayarme]

[yo estar a punto de desmayarme]: *PRES./PS. [yo estar a punto de desmayarme]

(5)によれば、スペイン語の話し手による言語外現実の言語化は、まず、話し手が伝えるべき言語外現実を認知することから始まる(5i)。次に、話し手はその認知した言語外現実を表すための言語形式を模索することになるが、言語外現実は、通常、複数の命題によって表すことが可能なため、実際の表出形式は、それらの命題の中から当該現実を表すために話し手によってもっとも適切と判断されたものということになる(5ii)。ただ、そのとき重要なのは、(5iii)のアステリスク(*)が示すように、命題によっては、それを表出することのできる「時制」に制約がかかる点である。

本稿における「命題」とは、言語外現実を言語化するために相応しいと話し手が判断した、時制化される前の言語形式のことで、表記上、[]の中に不定詞の形で示される。この命題がどのような「時制」で表出されるかは、当該命題の意味内容とPRES., PS.といった大文字で表記された各「時制」の機能がうまく合致するか否かにかかっている。前述の「命題を表出することのできる「時制」に制約がかかる」というのは、まさに当該命題の意味内容と当該「時制」の機能が相容れない場合のことを指す。つまり、本稿では、先に見た(4a)において点過去形(ps.)が出現しないのは、[por poco yo desmayarme]という命題の意味内容と点過去形の機能が相容れないからであり、同様に、(4b)において点過去形(ps.)と現在形(pres.)の両方が出現したのは、[yo casi desmayarme]という命題の意味内容が点過去形の機能と現在形の機能のどちらとも合致したことによると解釈されるのである。

スペイン語における時制の出現を以上のような言語外現実の言語化のプロセスの結果と解釈するならば、現在形によって表出された文も、同様のプロセスを経て出現したものということになる。このとき、本稿が問題とする現在形の「同時性」は大文字のPRES.で表された現在形の機能規定の一部と見なされる⁸。すなわち、本稿が明らかにしようとするのは、現在形によって表出されることになる命題のすべてに適用される現在形の機能PRES.としての「同時性」の解釈ということになる。

2. presente persistente (permanente あるいは general)

本節では、スペイン語における時制の出現を前節で提示したような言語外現実の言語化のプロセスの結果と考えた場合、従来 presente persistente (permanente あるいは general、以下、「持続的現在」)と呼ばれてきた現在形の用法がどのように分析されるかを見ていく。まず、スペイン語の「持続的現在」の用法がどのようなものかを Porto Dapena (1989) に従いまとめてみる。

- (6) a. Dos y dos son cuatro. 2たす2は4である。
 b. Madrid está en el centro de España. Madrid はスペインの中心にある。
 (7) Ese profesor enseña muy bien. その教師はとてもうまく教える。
 (8) Tu casa es bastante grande. 君の家はかなり大きい。
 (9) a. En la fotografía, S.M. el Rey saluda al Presidente del Gobierno.
 写真の中で、国王陛下は首相に挨拶している。
 b. La Biblia dice que Dios hizo el mundo en seis días.
 聖書は神は6日で世界を作ったと言っている。 (Porto Dapena 1989: 47-48)

Porto Dapena (1989:47-48) によれば、(6) は時間的制約のない普遍的価値を持つ presente gnómico「格言的現在」、(7) は話し手の個人的経験に基づく presente empírico「経験的現在」、(8) は発話時に存在する対象物の特徴に言及する presente descriptivo「記述的現在」、(9) は教科書等の説明文、新聞記事、写真のキャプション等で用いられる presente analítico「分析的現在」と呼ばれる用法である。Porto Dapena が(6)から(9)の現在形の用法を「持続的現在」としてまとめたのは、それらが“se utiliza para indicar acciones o situaciones de carácter general o inmutable (一般的あるいは不変的な性質の動作または状況を示すために用いられる)” (Porto Dapena 1989:47) ことに因る。つまり、この「持続的現在」における現在形は、特に、発話時において展開する事態に言及しているわけではないのである。この用法を、前節で提示したスペイン語における時制出現のプロセスの観点から見ると、次のように分析されることになる。

- (6)' a. Dos y dos son cuatro.
 = PRES. [dos y dos ser cuatro]
 b. Madrid está en el centro de España.
 = PRES. [Madrid estar en el centro de España]
 = PRES. [[referenteMadrid] [estar en el centro de España]]
 (7)' Ese profesor enseña muy bien.
 = PRES. [ese profesor enseñar muy bien]
 = PRES. [[referenteese profesor] [enseñar muy bien]]
 (8)' Tu casa es bastante grande.
 = PRES. [tu casa ser bastante grande]
 = PRES. [[referentetu casa] [ser bastante grande]]
 (9)' a. En la fotografía, S.M. el Rey saluda al Presidente del Gobierno.
 = PRES. [S.M.el Rey saludar al Presidente del Gobierno]
 = PRES. [[referenteS.M.el Rey] [saludar al Presidente del Gobierno]]

b. La Biblia dice que Dios hizo el mundo en seis días.

= PRES. [la Biblia decir que Dios hizo el mundo en seis días]

= PRES. [[referentela Biblia] [decir que Dios hizo el mundo en seis días]]

本稿の考えるスペイン語の時制出現のプロセスに従うならば、(6a)のような真理を表す「格言的現在」は、命題の表す概念自体が発話場面において関与的 (relevante) な話題として提示された情報であることを示したものであるということになる。一方、同じ「格言的現在」でも、(6b)のようにその主語が具体的対象を指示している場合、その命題は主語が示す指示対象 (referente) の「属性 (記述的情報)」を表示するものとなる。つまり、(6b)の [estar en el centro de España (スペインの中心にあること)] という命題は、発話時における指示対象 Madrid の「属性 (記述的情報)」として存在しているのである。これは、当該命題の内容が、発話時における主語の指示対象のいわば「レッテル (etiqueta)」として機能していると言うに等しい。

このような現在形が指示対象に対して示す「レッテル」機能は、(7') (8') (9') が示すように、Porto Dapena (1989) が「持続的現在」としてまとめたその他の用法にも適用できる。なかでも、本稿が特に注目したいのは (9) の「分析的用法」である。(9a) は新聞等の写真のキャプションによく現れる現在形であるが、この現在形が示すのは常にすでに起こった過去の事実である。それにも拘らず、当該用法で現在形が出現するのは、その命題が当該記事を読んでいる読者の眼前にある写真の中の対象の「属性 (記述的情報)」となっているからである。このことは、Fernández Ramírez (1986:216) があげた以下の例においてより明らかになる。

(10) Durante la visita realizada al hospital de la Santa Caridad, el Jefe del Estado recorre las salas de los enfermos, en algunas de las cuales conversó (ps.) unos instantes. (ABC, 22-4-1953の写真のキャプション)

Santa Caridad 病院を訪問中、国家元首 (Franco 総統) は病室をめぐり、その中のいくつかではしばらくの間会話を交わした。

(10) は、Fernández Ramírez (1986) が「分析的現在」と過去形との頻繁な共起関係を示すために引用した例である。本稿の解釈に従うならば、この例において現在形 “recorre (彼は歩きまわる)” と点過去形 “conversó (彼は会話をした)” が混在しているのは、前者が新聞の読者が直接目にして見ている写真の中の人物、つまり、当該文の主語の指示対象 (国家元首である Franco 総統) の記述であるのに対し、後者は写真には写っていない当該人物の過去の行為に言及したものであることに因る。

一方、(9b) は教科書や学術書の中でよく見かける「分析的現在」の用法であるが、ここでも (9a) と同様、現在形で表出された内容は主語の指す対象の「属性 (記述的情報)」を表していると理解される。ただし、このタイプの「分析的現在」の命題に出現する動詞は “decir que... (... と言う)”, “indicar/señalar que... (... を示す)”, “expresar (を表す)” のように伝達・表象動詞であることが多く、その現在形による表出は概ね以下のように書き換えることができる。

(11=(9b)) La Biblia dice que Dios hizo el mundo en seis días.

聖書は神は6日で世界を作ったと言っている。

⇒ Según la Biblia, Dios hizo el mundo en seis días.

聖書によれば、神は6日で世界を作った。

すなわち、上記の例のように、主語が無生の伝達・表象文にあつては、従属文が表すその伝達・表象内容こそが重要であり、主語はその内容の単なる「出所」としてしか解釈されないのである。

ところで、従来、「分析的現在」の典型例としては、上で見た新聞記事の写真のキャプションに出現した現在形が取り上げられてきたが、いわゆる「持続的現在」の機能を対象の発話時における「レットル (etiqueta)」表示と捉えるならば、新聞の見出しに出現する現在形もこの「分析的用法」の一種と捉えることが可能である。以下の例を見られたい。

- (12) a. Michael Jackson muere a los 51 años (<http://www.rtve.es/noticias/26/06/09>)
 マイケル・ジャクソン51歳で死ぬ。
 b. Fallece Michael Jackson マイケル・ジャクソン亡くなる。
 (http://www.elpais.com/articulo/gente/Fallece/cantante/Michael/Jackson/elpepugen/20090625elpepuage_8/)

(12)の各例は、アメリカの有名なポップス歌手Michael Jacksonが死去したことを報じたインターネットのニュースおよび新聞の見出しである。このように、インターネットのニュースサイトの見出しや新聞の見出しでは、過去の出来事が現在形で表出されることが非常に多い。しかし、そのような見出しでは、通常、先に見た新聞の写真のキャプションとは異なり、現在形“muere (死ぬ)”、“fallece (亡くなる)”によって記述されるべき指示対象の写真や図は提示されていない。このような「ホット・ニュース」を提示する現在形は、次のように分析される。

- (12)' a. Michael Jackson muere a los 51 años
 = PRES. [Michael Jackson morir a los 51 años]
 b. Fallece Michael Jackson
 = PRES. [fallecer Michael Jackson]

新聞の写真のキャプションに出現した「分析的現在」と(12)のような新聞等の見出しに出現した現在形との違いは、前者では、現在形の示す「属性 (記述的情報)」を備えた指示対象 (referente) が予め読者によって認知されているのに対し、後者では、その主語を含んだ文全体が読者にとって新情報として提示されているという点にある。つまり、見出しに出現する「分析的現在」では、主語を含む命題全体が読者の「今」にとって関与的な対象として提示されているのである⁹。

以上、本節では Porto Dapena (1989) が「持続的現在」という名でまとめた現在形の諸用法を見た。その結果、「持続的現在」を構成する「格言的現在」「経験的現在」「記述的現在」「分析的現在」の用法では、共通して、現在形によって表出された命題内容が当該文の指示対象の発話時における「属性 (記述的情報)」として解釈されることが分かった。つまり、「持続的現在」における現在形は、当該命題内容が発話時における指示対象のいわば「レットル (etiqueta)」になっていることを表すのである。

3. presente cíclico (あるいは iterativo)

本節では Porto Dapena (1989) が presente cíclico (あるいは iterativo、以下、反復的現在) と呼ぶ用法と現在形出現のプロセスの関係を見ていく。Porto Dapena (1989) が「反復的現在」と呼ぶ現

在形の用法は次のようなものである。

- (13) a. Vamos a clase todos los días. 私たちは毎日授業に行く。
 b. Duermo siete horas diarias. 私は毎日7時間眠る。 (Porto Dapena 1989:49)

(13)の例が示すように、Porto Dapena (1989:49)の言う「反復的現在」とは、多くの場合、“todos los días (毎日)”、“cada semana (毎週)”のような分布的表現 (expresiones distributivas) と共に出現し、当該事態が周期的あるいは反復的に行われることを示す現在形の用法で、スペイン語教育では一般に「現在の習慣的用法」と呼ばれている。この「反復的現在」は、Porto Dapena (1989:49)も指摘するように、定義上、反復可能な非状態的命題において表出される。また、先に見た「持続的現在」と同様、現在形によって表出される命題内容は、通常、発話時には展開していない。このような「反復的現在」における現在形出現のプロセスは、以下のように分析される。

- (13)' a. Vamos a clase todos los días.
 = PRES. [referente [nosotros 省略] [ir a clase todos los días]]
 b. Duermo siete horas diarias.
 = PRES. [referente [yo 省略] [dormir siete horas diarias]]

(13'a) (13'b)はそれぞれ、発話時において、主語の指示対象に現在形の表す命題内容が「属性(記述的情報)」として備わっていることを示している。なお、「反復的現在」の主語は、命題の表す事態が反復されることさえ保証されていれば、以下のように無生になることも可能である。

- (14) a. El sol sale por Oriente. 太陽は東から出る。
 b. Los árboles echan las hojas en primavera. 木々は春に葉をつける。 (Porto Dapena 1989:49)

上記の(13a) (13b)および(14a) (14b)は、その指示対象が有生か無生かという違いはあるものの、いずれも現在形の表す反復的事態が指示対象の「属性(記述的情報)」として解釈されるという点において前述の「持続的現在」と共通している。そのため、次の例が示すように、命題内容によっては、「持続的現在」と「反復的現在」の境が曖昧になることがある。

- (15) Raquel lee mucho. ラケルはよく読書する。 (Porto Dapena 1989:49)
 (16) a. Trabaja en un colegio. 彼は小学校で働いている。(Ibid.)
 b. Su marido trabaja de camarero. 彼女の夫はウェイターとして働いている。 (Porto Dapena 1989:48)

(15)はその「反復的」性質が曖昧になるものとしてPorto Dapena (1989:49)があげた例である。確かに、この例は「持続的現在」の「経験的現在」用法あるいは「記述的現在」用法として解釈することも可能である。また、(16a)も同様に、Porto Dapena (Ibid.)によってその「反復的」性質が不明瞭とされた例であるが、Porto Dapena (1989:48)はこれとよく似た(16b)は「持続的現在」の「記述的現在」の例としてあげている¹⁰。Porto Dapena (1989:48-49)によれば、このように「持続的

現在」と「反復的現在」の区別が不明瞭になるのは、特に、当該動詞が“carácter durativo（継続的性質）”を有している時だと言う。しかし、「現在形」の機能という観点から見たときに重要なのは、「持続的現在」であれ「反復的現在」であれ、どちらも現在形で表出された命題内容が主語の示す指示対象の「属性（記述的情報）」として解釈されるという点である。これは、言い換えるならば、その「属性（記述的情報）」が「反復的」的なものと解釈されるか否かは、現在形で表出される命題の意味内容や言語外の知識に因ることである¹¹。

以上のことから、本稿は、「反復的現在」における現在形も、「持続的現在」の場合と同じく、当該命題の内容が発話時における指示対象の「レットル (etiqueta)」として機能することを表すものであると考える。

4. 過去に言及する現在形

本節では過去に言及する現在形として、Porto Dapena (1989) が presente histórico（以下、歴史的現在）としてあげた現在形の用法および Fernández Ramírez (1986) が presente perfectivo（以下、完了的現在）としてあげた用法を見ていく。

4.1. Porto Dapena (1989) の presente histórico

Porto Dapena (1989:50) は「歴史的現在」として以下の例をあげている。

- (17) El Rey Sabio sube al trono en 1252 y con él se inaugura un período de esplendor cultural en España. (uso narrativo 語りの用法)
賢王は1252年に王位につき、彼とともにスペインにおける文化的最盛期がはじまる。
- (18) Entonces va él y le dice por qué no viene... (uso conversatorio 会話用法)
そのとき彼が行き、彼女になぜ来ないのかと言う。
- (19) Ve a mi abuela arrimada a su bastón. (uso onírico 夢の用法)
私は祖母が杖にもたれかかっているのを見る。 (Porto Dapena 1989:50)

Porto Dapena (1989:50) によれば、(17) の uso narrativo（「語りの用法」）は小説を始めとする書き言葉に特有の用法で、当該の語りに生彩を与えるものであり、(18) の uso conversatorio（「会話用法」）は「語りの用法」が話し言葉に応用されたものである。一方、uso onírico（「夢の用法」）は、想像や夢を叙述するために用いられるものだという。

これらのうち「語りの用法」と「会話用法」について、Porto Dapena (1989:50) は、どちらもその叙述を生き生きしたものにするると述べているが、Yamamura (印刷中) が指摘するように、その効果が発揮されるためには、当該現在形は点過去や線過去といった過去の時制によって表出された文脈に出現する必要がある。つまり、「語りの用法」「会話用法」に見られる現在形の表現効果は、過去時制を基盤とする文脈に出現した現在形が喚起する「異化作用」とも言えるものなのである。その証拠に、(17) (18) のように過去時制を基盤とする文脈を欠いた「語りの用法」「会話用法」は、2. で見た「分析的現在」と判別し難くなる。同様のことは、「夢の用法」の現在形についても言える。「夢の用法」の現在形が出現する文脈には、それが発話場面で実際に展開する事態に言及してはならないことを示唆する表現が必要となるからである¹²。

以上のことから、本稿は、「歴史的現在」と他の現在形の用法¹³を分ける最も大きな要因はその出

現文脈が過去時制を基盤とするということにあり、単に当該現在形が過去に起こった言語外現実と言及するという点にあるのではないと考える。そうすれば、先に見た「持続的現在」「反復的現在」が話し手の発話場面において関与的な指示対象の「属性（記述的情報）」を示すのと同様に、「歴史的現在」は、その出現文脈が示す「非発話場面」において関与的な指示対象の「属性（記述的情報）」を表すと解釈することが可能になる。しかし、上述した「歴史的現在」の「異化作用」を考慮するならば、「歴史的現在」の出現に不可欠な「非発話場面」は、いわば「擬似発話場面」とも呼べる場面に再解釈されると考える必要がある。結果、本稿が考える「歴史的現在」とは、文脈が導入した過去の「非発話場面」の再解釈である「擬似発話場面」において、関与的な指示対象の「属性（記述的情報）」を表出する現在形の用法、ということになる。

4.2. Fernández Ramírez (1986) の presente perfectivo

過去に言及する現在形については前節で見た「歴史的現在」の他に、Fernández Ramírez (1986) が「完了的現在」と名付けた用法もある。本項ではこの「完了的現在」の用法について考察する。

Fernández Ramírez (1986:232) は、スペイン語の現在形はある状況において過去形と中和すると述べている。そのうち本稿が特に注目したいのは、Fernández Ramírez (1986:233-234) が「完了的現在」と呼ぶ用法である。この「完了的現在」について、Fernández Ramírez (1986:234) は、“Muchos verbos perfectivos admiten en presente la interpretación que correspondería a un perfecto¹⁴ 《cuando se considera como resultado de la significación del verbo el resultado continuado que es el efecto de la acción singular expresada fundamentalmente por el verbo perfectivo》（多くの完了的動詞の現在形は、《基本的に同動詞によって表出された一回限りの行為の効果である継続的な結果がその動詞の意味の結果と見なされる時》、現在完了形に対応するという解釈を認める）”と述べている。この例としてあげられたのは以下のような文である。

(20) Traigo tabaco para ti. → He traído (pc.) tabaco para ti.

私は君のためにタバコを持ってきた。

(21) Dice papá que vayas. → Ha dicho (pc.) papá que vayas.

パパはお前が行くようにと言っている。

(Fernández Ramírez 1986:234)

上記の例が示すように、Fernández Ramírez が「完了的現在」と呼ぶ現在形の用法は日本語の「タ」形によって訳されることが多い。そのような観点からすれば、Fernández Ramírez (1986) にはあげられていないが、以下のような現在形も「完了的現在」と見なされることになる。

(22) Bueno, ahí viene el tranvía. Vamos, subid. (CREA, *Barrio de Maravillas*)¹⁵

さて、あそこに電車が来た。さあ、乗って。

(23) Vengo a pedirte consejo, (...). (CREA, *La reina del sur*)

私は君に助言を求めに来た、(...)

また、Fernández Ramírez (1986:236) は、スポーツの実況放送、テレビのニュース、新聞の見出し、さらに、Porto Dapena (1989) が「分析的現在」とした写真のキャプションに用いられる現在形も「完了的現在」と解釈している。ここで、Fernández Ramírez (1986) の「完了的現在」と Porto Dapena (1989) の「分析的現在」の一部が重なっている点に注目するならば、Fernández Ramírez

(1986)の「完了的現在」も「分析的現在」と同じように分析されるという可能性が出てくる。つまり、以下のように、「完了的現在」においても「分析的現在」と同様、現在形によって表出された命題内容が当該文の指示対象の発話時における「属性（記述的情報）」と解釈されうるということである。

- (20)' Traigo tabaco para ti. = PRES. [referente [yo 省略] [traer tabaco para ti]]
 (21)' Dice papá que vayas. = PRES. [referente [papá] [decir que...]]
 (22)' ahí viene el tranvía. = PRES. [ahí venir el tranvía]
 (23)' Vengo a pedirte consejo. = PRES. [referente [yo 省略] [venir a pedirte...]]

(20)から(23)の「完了的現在」には次のような特徴がある。まず、Fernández Ramírez (1986:234)も指摘しているように、「完了的現在」には、(20)(22)(23)のように、当該文の指示対象が当該発話の構成員の眼前に存在していることを示すものが多いという点である。すなわち、(20)で言及された対象、「私」、「君」、「タバコ」、同様に、(22)の「電車」、(23)の「私」、「君」は、すべて発話場面を構成するものとして存在しているのである。この対象の「存在」という点に注目するならば、これらの例文が表す言語外現実自体は“Tengo tabaco para ti (私は君のためのタバコを持っている)”、“Aquí está el tranvía (あそこに電車がいます)”、“Estoy aquí para pedirte consejo (私は君に助言をもらうためにここにいる)”のような状態動詞を用いて表出することもできるはずである。それにも拘らず、当該の言語外現実を言語化するにあたり、そのような状態動詞ではなく“traer (持ってくる)”、“venir (来る)”といった移動動詞が選択されたのは、移動動詞を用いた命題内容こそが言語化される指示対象のあり様を正しく記述するものだからであろう。実際、(20)の“traer”、(23)の“venir”の現在形は、「私」が他の場所から移動して来た結果として発話場面に存在していることを、また、(22)の“venir”の現在形は、「電車」が話し手の視覚にいきなり出現したという形で存在していることを明示するが、状態動詞“tener”、“estar”の現在形にそのような意味はない。

また、Fernández Ramírez (1986:234)は、“Traigo tabaco para ti”は“He traído (pc.) tabaco para ti”という現在完了形に置き換えられると指摘しているが、このような置換は常に起きるわけではない。例えば、“Mira, ahí viene... (見て、あそこに... が来た)”のように、空間の直示的副詞と共に当該対象が発話場面に出現したことを表す現在形は、CREAによる検索やスペイン語母語話者に対する調査によると、現在完了形には置換されないからである。このことは、「完了的現在」と現在完了形は同じ言語外現実と言及することはあっても、その基本的機能は互いに異なること、また、前者の出現には、特に、話し手による指示対象の直接的「知覚」が関係することを示唆するものである。

一方、(21)は、Fernández Ramírez (1986:234)も指摘するように、その指示対象「パパ」が発話場面に存在していないという点で前述の例文とは異なっている。それにも拘らず、そこで現在形が出現しているのは、同文の中で発話場面に直接関与しているのが指示対象「パパ」ではなく、その指示対象「パパ」が発話した内容、つまり、従属文の内容だからであろう。また、(21)の現在形“dice”が指示対象「パパ」の発話時以前の発話行為に言及していると解釈されるのは、queに導かれた従属文によって発話(伝達)内容が明示されていることに因ると思われる。通常、発話(伝達)内容というのは誰かが事前に発話(伝達)していなければそれと認識されないものだからである¹⁶。このように考えるならば、(21)の「パパ」は発話(伝達)行為の動作主というより、「分析的現在」の(9b)における「聖書」と同じく、当該文が示す発話(伝達)内容の「出所」と解釈されることになる。

4.3. 過去に言及する現在形のまとめ

以上、本節では過去の事態に言及するとされる現在形の特徴を考察した。

まず、「歴史的現在」については、この用法と現在形の他の用法の主たる違いは、それが過去の事態に言及することにあるのではなく、その出現文脈が過去時制を基盤としている点にあることを指摘した。そして、それを踏まえながら、「歴史的現在」の現在形は、文脈が導入した過去の「非発話場面」の再解釈である「擬似発話場面」に関与する指示対象の「属性（記述的情報）」を表出する用法、とした。

一方、Fernández Ramírez (1986) が「完了的現在」と呼ぶ用法の現在形については、その命題内容が当該文の指示対象の発話場面における「存在」のあり様を示すこと、また、当該文の動詞が伝達動詞の場合には、発話場面において重要なのは従属文の示す伝達内容であり、主語はその伝達内容の発信元に過ぎないということを表すものであることを示した。

5. 未来に言及する現在形

スペイン語の現在形は未来の事態に言及することもできる。本節では、そのような未来に言及する現在形とその「同時性」の関係を Porto Dapena (1989) および Fernández Ramírez (1986) の記述を基に見ていく。

Porto Dapena (1989:50-51) は未来に言及する現在形を *presente prospectivo* (以下、「未来の現在」) と名付け、以下の例をあげている¹⁷。

(24) Esta noche voy al teatro con mi novia. 今夜僕は恋人と観劇に行く。

(25) Ya sale la procesión. もう行列が出発する。

(26) ¡Socorro! Me ahogo. 助けて！私、溺れる。

(27) El tren llega a las 10h. Faltan veinte minutos.

電車は10時に着く。まだ20分ある。

(Porto Dapena 1989:51)

Porto Dapena (1989:51) によれば、(24) (25) の現在形は当該事態の実現が差し迫っていること、(26) の現在形はその実現が差し迫っているだけでなく不可避であること、さらに、(27) の現在形は当該事態の実現が事前に予定されたものであることを表す。このように Porto Dapena (1989) が「未来の現在」としてあげた用法は、“(...) en términos generales implica una idea de inminencia y/o firme determinación, (...) (一般に切迫感および/あるいは確定的な考えを含意する)” (Porto Dapena 1989:50) という共通項を持っている。なかでも、「未来の現在」が当該事態の確定的な生起を含意するという主張は、「未来の現在」と *futuro* (未来形) との機能的差異を説明する際にしばしば見受けられるものであるが、問題がないわけではない。Porto Dapena の言う「当該事態の確定的な生起」を「話し手による当該事態の生起に対する確信」と解釈するならば、次の例が示すように、未来形も当該事態の確定的な生起を含意する文脈で出現すると言えるからである。

(28) (...) y estoy segura de que el año que viene me pagará (fut.) más.

私は来年はもっと報酬を払ってくれると確信している。(CREA, *Tiempo* 17/12/1990)

(29) Esta noche sin falta hablaré (fut.) con él.

今夜私は必ず彼と話す。(CREA, *Madera de héroe*)

(28) (29) のような未来形の用法を考慮するならば、「未来の現在」だけが確定的な未来の事態に言及するとは言えないだろう¹⁸。このことを踏まえ、本稿では、「未来の現在」もこれまで分析してきた各用法の現在形と同様、当該文の指示対象の「属性（記述的情報）」を表すものと解釈する。そのように解釈するならば、「未来の現在」は以下のように分析されることになる。

- (24)' Esta noche voy al teatro con mi novia.
= PRES. [referente [yo 省略] [ir al teatro con mi novia esta noche]]
- (25)' Ya sale la procesión. = PRES. [ya salir la procesión]
= PRES. [[ya salir] referente [la procesión]]
- (26)' ¡Socorro! Me ahogo. = PRES. [referente [yo 省略] [ahogarme]]
- (27)' El tren llega a las 10h. = PRES. [referente [el tren] [llegar a las 10h.]]

以上の解釈に従うならば、「未来の現在」の現在形は、先に見た現在形の諸用法と同じく、発話場面において関与的な指示対象の「属性（記述的情報）」を提示するだけであり、当該事態の生起の確定度を述べているわけではないということになる。

とはいえ、上の例からも分かるように、「未来の現在」として解釈される文には、非状態的であり、未来時に言及する時の副詞句と共起することが多いという特徴がある。また、上記の分析では、「未来の現在」と共起した時の副詞句が指示対象の「属性（記述的情報）」の一部になっている点も重要である。これは、「未来の現在」と共起する時の副詞句は当該事態を発話時以降の時間軸上のどこかに「定位」させるものではないことを示すものだからである。つまり、本稿の見方によれば、「未来の現在」が表す事態は、話し手が注目した指示対象が有する「属性（記述的情報）」であるという意味で、あくまで話し手の発話場面に定位されるのである。

ところで、Porto Dapena (1989:51-52)、Fernández Ramírez (1986:223-233) は、以下のような現在形の文も「未来の現在」の用法としている。

- (28) Mañana te levantas temprano y preparas el examen.
明日お前は早く起きて試験の準備をする。 (Porto Dapena 1989:51)

加えて Porto Dapena (1989:51) は、(28) の現在形では法 (modo)、すなわち直説法と命令法、および、時制 (tiempo)、すなわち、現在と未来の両方において中和化が起こっているとも指摘している。しかし、本稿による (28) の分析は、次のようになる。

- (28)' Mañana te levantas temprano y preparas el examen.
= PRES. [referente [tú 省略] [mañana levantarte temprano y preparar el examen]]

(28)' が示すように、本稿の解釈に従うならば、命令文と交換可能な「未来の現在」もこれまで見てきた現在形の諸用法と同じ分析になる。しかし、それに対して、Porto Dapena (1989:51) のように、(28) の現在形は他の現在形の用法とは異なるもの、法と時制の両方において中和化したものと解釈されるとしたら、そこには何か (28) の現在形に特有の要因があると思われる。本稿が考えるそのような要因は専ら語用論的なものである。すなわち、(28) が命令法と中和を起こしているように見えるのは、同文の指示対象が tú の示す聞き手であること、そして、その聞き手の「発話時」にお

ける「属性（記述的情報）」である発話時以降の聞き手の行動のあり方が、当事者ではない話し手によって表明されたことに因る、と考えるのである。つまり、(28)の現在形が、Porto Dapena (1989:51) が言うように、法と時制の両方において中和化したように見えるのは、あくまで当該文の語用論的解釈の結果であり、法と時制の体系そのものに関わるものではないということである¹⁹。

以上、未来の事態に言及する現在形について見てきた。その結果、「未来の現在」においても、これまで見てきた他の現在形の用法と同様、現在形で表出された内容は当該文が示す対象の発話時における「属性（記述的情報）」と見なされることが分かった。また、これまで「未来の現在」に付与されてきた「未来性」は現在形自体が表すものではなく、指示対象の「属性（記述的情報）」の一部と解釈される時の副詞句、あるいは、現在形によって表出される動詞の非状態性によって表されるものであることも示された。

6. presente actual

最後に、Porto Dapena (1989:47) によれば、現在形のもっとも基本的な用法であり、かつ、同時制の示す事態と「発話時」の「同時的關係」を明確に示すとされる *presente actual* (以下、アクチュアルな現在) を見る。現在形について論じた先行研究では、「アクチュアルな現在」の用法から解説していくのが一般的であるが、本稿がそのような方法を取らなかったのは、Fernández Ramírez (1986:212) も指摘していたように、純粹の「アクチュアルな現在」は実際にはほとんど存在しないと考えるからである。しかしながら、Real Academia Española が出版した最新の *Nueva Gramática de la Lengua Española* (NGLE) においても、現在形のこの用法は最初に取り上げられており、スペイン語の時制研究という観点からは無視することができない用法でもある。そういうことから、本稿は Fernández Ramírez の見方も考慮しつつ、この用法を再検討していくことにした。

6.1. presente actual と発話時との「同時性」

Porto Dapena (1989:47) は (29) (30) を、また、NGLE (2010:1709) は (31) (32) を「アクチュアルな現在」の例としてあげている。

(29) Juan sale en este momento de casa. フアンはこの瞬間（今）家から出る。

(Porto Dapena 1989:47)

(30) Ahora está dormido. 今彼は眠っている（眠りこんでいる）。(Ibid.)

(31) El delantero sale al terreno de juego. フォワードの選手がグラウンドに出る。(NGLE 2010:1709)

(32) Te lo prometo. 私は君にそれを約束する。(Ibid.)

(29) (31) ではどちらも同じ“salir (出る)”の現在形が使われているが、この動詞はいわゆる Vendler (1967) の achievement 類に属し、その開始と終結の間には時間的差がほとんどない。このように瞬時的事態を示す動詞の現在形が発話時と当該事態の「同時性」を示す現在形の文の典型例として選ばれているということに対し、本稿はいささか違和感を覚える。なぜならば、瞬時的事態の生起が発話行為と重複することは、その意味的特質から難しいと考えるからである。実際、(29) (31) の文は、先に見た「過去に言及する現在形」あるいは「未来に言及する現在形」と解釈される可能性がある²⁰。それに対し、(30)のように、その命題が Vendler (1967) の state 類に属するような文の現在形が示す事態と発話行為との時間的重複は自然である。しかしながら、(30)における発話

行為と当該事態の「同時性」が部分的なものである点には注意すべきである。(30)において発話行為と「同時関係」にあるのは[referente [él (彼) 省略] [estar dormido (眠っていること, 眠りこんでいること)]]という静的命題が表す部分だけであり、「睡眠」の開始と終結の「発話時」との関係は何も示されていないからである。一方、(32)は“prometer (約束する)”という遂行動詞の現在形の例である。このような遂行動詞文の主語の指示対象は、通常、話し手“yo (私)”になるので、現在形が表す事態が展開する時と発話行為の時は完全に一致する。その意味で、話し手が主語となった遂行動詞の現在形の文こそ、発話時と当該事態が同時的關係にある「アクチュアルな現在」の代表とすることができるであろう。

以上、先行研究が「アクチュアルな現在」とする例を見たが、それらの現在形が表出する事態と発話行為との「同時性」には差があることが明らかになった。このようにその「同時性」に関して違いがあるにも拘らず、それらが同じ「アクチュアルな現在」としてまとめられているのは、その間に何らかの共通項があるからであろう。その共通項は、これまで見てきた現在形の他の用法において確認されてきたものと同じものと思われる。次の分析を見られたい。

- (29)' Juan sale en este momento de casa.
= PRES. [referente [Juan] [salir en este momento de casa]]
- (30)' Ahora está dormido.
= PRES. [referente [él 省略] [ahora estar dormido]]
- (32)' Te lo prometo.
= PRES. [referente [yo 省略] [prometértelo]]

本稿の見方に従うならば、「アクチュアルな現在」においても、現在形で表された内容は当該文が示す対象の発話時における「属性 (記述的情報)」と解される。そのとき、上で見た各例の発話行為との「同時性」の差は、指示対象の「属性 (記述的情報)」として提示された命題内容の時間構造の違いという形で説明されることになる。

6.2. presente actual と現在進行形

スペイン語の現在形の特徴として、しばしば、日本語の非過去継続相の「テイル形」、英語の現在進行形に相当する意味内容を表すことができるということが指摘される²¹。以下の例を参照されたい。

- (33) Escribe una novela/Está escribiendo una novela. He's writing a novel.
- (34) ¿Qué haces?/¿Qué estás haciendo? What are you doing ?
(Butt & Benjamin 2000:201)
- (35) Ahora ve la televisión. 彼は今テレビを見ている。(山田他 1995:304)

(33) (34) はスペイン語の現在形が太線の引かれた現在進行形と共に英語の現在進行形に対応することを、また、(35) はスペイン語の現在形が日本語の動作継続を示す「テイル形」に対応することを示したものである。ここで問題になるのは、以上の例から、スペイン語の現在形はその現在進行形と同じ機能を持つと判断できるか否かということである。言語形式の違いは意味内容の違いに対応するという考えに従うならば、両者は当然異なる機能を持つということになるが、それでは、

その機能的差異は具体的にどのように分析されることになるのだろうか。この点について、Butt & Benjamin (2000:231-232) は次のように述べている。

- (36) (c) The Spanish continuous adds a nuance to, but does not substantially alter the meaning of the non-continuous verb form, so that the two forms are sometimes virtually interchangeable. (下線は引用者)
- (37) The Spanish continuous form is normally possible only when the action is clearly happening *now* or is being repeated now.
- (38) An action must be perceived to be actually in progress for the continuous to be possible. Peninsular informants said *está lloviendo* on seeing rain through a window, and thought that *llueve*, in this case, sounded vaguely poetic or archaic. But most avoided the continuous in the sentence *asómate a ver si llueve* ‘look out and see if it’s raining’ and *¿llueve o no llueve?* ‘is it raining or not?’, the reason being that someone who asks whether it is raining has obviously not actually seen or heard rain falling. (下線は引用者)

(36)の記述によれば、現在形と現在進行形はどちらも同じ言語外現実と言及できるが、後者は前者の意味に何らかのニュアンスを加えたものということになる。一方、(37)は、現在進行形が現在形の意味に加えるニュアンスの内容を述べたもので、それは当該事態が発話時において展開中であること、あるいは、その事態が発話時において反復されていることを明示することとなる。最後の(38)は、現在形と現在進行形のニュアンスの違いを英語の“*It’s raining*”で表される事態を例に説明したものである。それによれば、発話者が実際窓から雨が降るのを眺めている場面では現在進行形が用いられるが、雨が降っているか否かを確認するような場合には現在形が用いられると言う。

以上のButt & Benjamin (2000)の指摘から、本稿は、スペイン語の現在形と現在進行形の違いは、基本的に、第1節で見た言語外現実の言語化のプロセスにおける命題選択の違いに起因すると考える。それを“*llueve*”と“*está lloviendo*”を例に説明すると次のようになる。

(39=(5)) スペイン語の言語外現実の言語化のプロセス：

- i. 話し手による言語外現実の認知 = 「降雨」
- ii. 言語外現実の言語化のための命題の選択 [llover], [estar lloviendo]
- iii. 選択された命題の時制化 *Llueve.* = PRES. [llover]
Está lloviendo. = PRES. [estar lloviendo]

発話時における「降雨」という言語外現実の言語化にあたって、話し手は[llover (雨が降る)]という命題と[estar lloviendo (雨が降っている)]という命題のどちらかを選択することができる。その選択に際しては、話し手が当該言語外現実をどのように概念化しているかが大きく関わってくる。すなわち、同じ「降雨」という現象を[llover]という命題で概念化すると[estar lloviendo]という迂言形式の命題で概念化するのでは、話し手の「降雨」に対する認知のあり方が異なるのである。この「降雨」に対する[llover]と[estar lloviendo]の概念化の違いは、同一の言語外現実に対する単純時制形式による表出と“estar+ 現在分詞”という迂言形式による表出の違いに対応するものであるが、両者の違いについての詳細は別稿に譲る²²。ただ、“estar+ 現在分詞”という迂言形式が出現するためには、(38)が指摘するように、話し手が当該事態を実際に知覚・確認してい

る必要があるということは確認しておきたい。このようにして一旦現在形で表出されるべき命題が決まると、その後のプロセスはこれまで見てきた他の現在形の用法と同じで、選択された命題が当該指示対象の発話時における「属性（記述的情報）」として解釈されることになる。つまり、「降雨」のような天候表現においては、発話場面の状況自体がその指示対象となることから、[llover]の現在形による表出“Llueve”は、発話時の状況が単に「降雨」という「属性（記述的情報）」を持つものであることを、また、[estar lloviendo]の現在形による表出“Está lloviendo”は、発話時の状況が話し手によって実際に知覚・確認された「降雨」という属性を持つものであることを示すことになるのである。

現在形と現在進行形の違いを以上のように解釈するならば、スペイン語の会話で相手が何をしているかを尋ねる際に、なぜ“¿Qué estás haciendo?”という現在進行形ではなく、“¿Qué haces?”という現在形が出現しやすいのかという問題もうまく説明できるようになる。この問題を考えるにあたっては、まず、本稿が行った CREA の検索によると、“¿Qué haces?”と“¿Qué estás haciendo?”の出現頻度には、前者326回、後者38回のように大きな差が見られたことを確認しておきたい²³。また、本稿の解釈によれば、“¿Qué haces?”と“¿Qué estás haciendo?”は、それぞれ以下のように分析されることも指摘しておこう。

(40) ¿Qué haces?

= PRES. [主語省略 hacer qué]

= PRES. [[referente tú 省略] [hacer qué]]

(41) ¿Qué estás haciendo?

= PRES. [主語省略 estar haciendo qué]

= PRES. [[referente tú 省略] [estar haciendo qué]]

上述のことを踏まえながら、本稿の観点に従い、“¿Qué haces?”と“¿Qué estás haciendo?”の間の頻度差および意味的違いを考えると、次のようになる。

本稿の解釈によれば、“¿Qué haces?”というのは、発話場面における聞き手の「属性（記述的情報）」が何であるかを知るために、話し手が聞き手本人に発した疑問文である。この疑問文において現在形が用いられるのは、通常、この疑問文を発する話し手には聞き手に対する情報が何もないという自明の事実因る。言い換えるならば、“¿Qué haces?”という疑問文は、発話場面における聞き手の「属性（記述的情報）」を問うためのもっとも無標の形式なのである²⁴。それに対して、“¿Qué estás haciendo?”は単に聞き手の「属性（記述的情報）」を問うための疑問文とは言えない。CREA の検索例を詳細に観察すると、“¿Qué estás haciendo?”は、聞き手の行動を目の当たりにした話し手が、その行動に対する驚きや怪訝さ、不快感と共に発することが多いからである。つまり、話し手が“¿Qué estás haciendo?”という現在進行形を用いる際には、先に見た Butt & Benjamin (2000) の指摘にもあったように、話し手はすでに聞き手のあり様を何らかの形で知覚しているのである。

以上のことから、本稿は、スペイン語の会話において“¿Qué haces?”の頻度が高いのは、それが発話場面における聞き手の「属性（記述的情報）」を尋ねるための無標の形式であるからであり、一方、“¿Qué estás haciendo?”の頻度が低いのは、話し手がこの形式を用いるには、指示対象の直接的「知覚」といった、現在形によって表出される命題として [estar haciendo] という迂言形式が選択されるのに十分な動機が必要になるからであると考えられる。

6.3. presente actual のまとめ

以上、「アクチュアルな現在」が示す意味の特徴を見てきた。その結果、「アクチュアルな現在」の用法においても、発話時と完全な「同時性」を見せる例は少ないこと、それにも拘らず、同用法が、特に、発話時と「同時的關係」にあると主張されるのは、現在形で表出される命題内容の時間構造がそのような解釈を喚起しやすいものであることに因ること、また、「アクチュアルな現在」における現在形も他の用法の現在形と同様、当該命題の内容が指示対象の発話時における「属性（記述的情報）」となっていることが確認された。さらに、「アクチュアルな現在」をこのように解釈すれば、これまで問題となってきた現在形と現在進行形の機能的差異や両形式の間に見られる頻度差もうまく説明されることも示された。

7. 結論に代えて

本稿は、これまで先行研究がスペイン語の現在形に対して主張してきた「発話時と当該事態の同時性の表示」という機能が何を意味するのかを解明するために、現在形の諸用法に共通して見られる「発話時」と当該事態の意味特徴の関係を考察してきた。その結果、現在形の様々な用法に共通するのは、現在形で表出された命題内容が話し手の発話場面（あるいは、それ相当の場面）において関与的な指示対象の「属性（記述的情報）」となっていることであることを見た。換言すれば、現在形は発話場面（あるいは、それ相当の場面）における指示対象のあり様を説明する「レットル」のようなものということである。この結果を踏まえて、改めて現在形の機能の一部である「同時性」の意味を考えるならば、それは、話し手の注目した指示対象が－発話場面に実際に存在していることもあれば、話題として話し手の心中で活性化しているだけの場合もある－、現在形によって表出された命題内容をその発話場面における「属性（記述的情報）」として有していることを意味することになる。現在形の「同時性」をこのように捉えるならば、以下のように、同じ動詞の現在形の文が「完了的現在」と「未来の現在」の両方に用いられることも矛盾なく理解されることになる。

- (42) a. ¿No hay nadie? Olga, te traigo un encargo de Lauro.
 誰もいないのか。オルガ、お前にラウロの注文を持ってきた。(CREA: *Sala de no estar*)
 b. Túmbate en la cama. Espera, que te traigo un poco de agua...
 ベッドに横になって。待って、少し水を持ってくるから。(CREA: *Vis a vis en Hawaii*)

(42) では同じ“te traigo（お前に持ってくる）”という現在形の文が出現しているが、(42a) は「完了的現在」、(42b) は「未来の現在」と解釈される。ここで問題になるのは、「完了」と「未来」のように相反する事態がなぜ同じ現在形によって表出されるのかということであるが、この問いに対して本稿は次のように答えたい。つまり、これらの現在形の文はどちらも発話場面における指示対象“yo（私）”の「属性（記述的情報）」を示しているだけであり、それが「完了的」と解釈されるか、あるいは、「未来」と解釈されるかは当該文が発話される場面の状況に依る。すなわち、(42a) が「完了的現在」と解釈されるのは発話場面にラウロからの注文品が現に存在しているからであり、(42b) が「未来の現在」と解釈されるのは発話場面にまだ水が存在していないということに因るのである。

このように、現在形によって表出された文は、話し手の発話場面（あるいは、それ相当の場面）において関与的な指示対象の「属性（記述的情報）」を表すが、ここで、今一度、話し手の「発話場

面」、指示対象の「属性（記述的情報）」の意味について確認しておきたい。

まず、話し手の「発話場面」についてだが、これまで、本稿はこの「発話場面」を「発話時」、「発話行為」とも呼んできた。これらは互いに同じものを指すが、本稿はそれを新たに、話し手の発話行為のもっとも直接的な基盤となる「場」であり、実際あるいは話し手の活性化された心中において存在する対象が、現在形によって表された命題内容をその「属性（記述的情報）」として有する、話し手にとってもっとも関与的な「アクチュアルな場」と定義したい。

一方、指示対象の「属性（記述的情報）」については、「属性」という語が「記述的情報」と補足されている点に注目してもらいたい。本稿がこのように「属性」に「記述的情報」という語を付加したのは、スペイン語の現在形の表す対象の「属性」が、一般に「属性」という語の喚起する意味より広い意味を持っているからである。通常、「属性」という語は、対象の時空間の制限を受けない特徴－いわゆる Kratzer (1995) の言う individual-level の特徴・性質－という意味で用いられるが、スペイン語の現在形が表す対象の特徴・性質は、時空間の制限を受けないもののみならず、話し手の「アクチュアルな場」においてのみ有効な、時空間の制限を受けた特徴－Kratzer (1995) の言う stage-level の特徴・性質－をも含む。本稿は、このスペイン語の現在形が表す「属性」の特徴を明示するために、「属性」に「記述的情報」という語を付け加えたのである²⁵。

以上、これまでの本稿での議論をまとめるならば、スペイン語の直説法現在形は、当該命題が、話し手の「アクチュアルな場」において、話し手が注目した指示対象の「属性（記述的情報）」であることを表す時制形式ということになる。このように考えるならば、これまで先行研究が現在形に付与してきた様々な用法は、結果的に、現在形で表出された命題の意味的特徴に因るものと解釈されるであろう。一方、本稿が提示したスペイン語直説法現在形の機能の観点からこれまで同時制に付与されてきた発話時との「同時性」を再考するならば、それは、まず、話し手の「アクチュアルな場」に話し手にとって関与的な対象が「存在」するということ、つまり、話し手の「アクチュアルな場」と対象の存在的同时性、そして、その対象が当該命題の内容をその「アクチュアルな場」において有効な「属性（記述的情報）」として有しているということ、すなわち、「アクチュアルな場」とそこに存在する対象の持つ「属性（記述的情報）」の同時性ということになる。

注

- 1 Cf. Bello (1981), p.400, Porto Dapena (1989), p.46, Rojo (1974), p.94, GDLE (1999), pp.2000-2005, NGLÉ (2009), p.1709.
- 2 例文中で問題になる現在形は下線で示す。また、現在形以外の時制形式は下線と共にその時制を括弧内に入れて示す。各時制の略号は次のとおり。ps.= 点過去形、imp.= 線過去形、pc.= 現在完了形、fut.= 未来形。なお、例文に出典の記述がないものはすべて筆者の作例である。
- 3 本稿が対象とするスペイン語はスペインで話されているスペイン語であり、中南米で話されているスペイン語は対象としない。
- 4 Cf. NGLÉ (2010), p.1674.
- 5 Cf. 山村 (2011), 1.1.
- 6 山村 (2011) の実施した google 検索（検索対象地域はスペイン、検索対象語はスペイン語、検索語は“yo también fui (ps.) niño”と“yo también era (imp.) niño”、アクセス日は2011年11月20日）の結果によれば、点過去のヒット数150に対し、線過去のヒット数は9であった。
- 7 このことは“estar a punto de+ 不定詞”がimp.によって表出されないことを意味しない。あくま

- で(4)のように独立した単文という文脈では線過去形によって表出されにくいということである。
- 8 本稿は、スペイン語の動詞単純時制形式が表す各時制の機能は、基本的に、「基準時」とそれに対する「前時性」「同時性」「後時性」という時間関係によって規定できると考えている。そのような観点から現在形の機能を規定するならば、それは「発話時に対する同時性の表示」ということになる。このことから、「同時性」は現在形の機能規定の一部ということになる。
 - 9 (12)'の各文の主語が(6)'から(9)'の各文の主語とは異なり [referente ...] と分析されていないのは、主語を含む命題全体が新情報になっていることに因る。
 - 10 Porto Dapena (1986:46) は「持続的現在」と「反復現在」の区別が不明瞭になる例として、(15)のように人が主語の文をあげているが、同様のことは(14a) (14b)のようにモノが主語になった文にもあてはまる。例えば、Porto Dapena (1986:47) は“La tierra gira alrededor del sol. (地球は太陽の周りを回る)”における現在形の用法を「持続的現在」としているが、この例と「反復的現在」の(14a)の用法は、どちらも「真理」を表すという点で共通する。それにも拘らず、Porto Dapena (1989:47, 49) が両者を区別したのは、当該文の動詞の時間構造の違いに因ると思われる。つまり、“salir (出る)”のような限界的な動詞の現在形は「反復」的解釈を喚起するのに対し、“girar (回る)”のような非限界的な動詞の現在形は「反復」的解釈を喚起しないということである。
 - 11 「命題の意味内容に因る」というのは、注10でも指摘したように、限界的な動詞句から成る命題の現在形による表出は「反復的現在」の解釈を喚起しやすいこと、また、“todos los días (毎日)”, “cada semana (毎週)”, “...horas diarias (毎日 ... 時間)”等のような配分的表現を備えた命題の現在形による表出も、同様に、「反復的現在」の解釈を喚起しやすいことを指す。一方、「言語外の知識に因る」というのは、例えば、“Juan fuma. (フアンは喫煙する)”のような文は、発話者が指示対象 Juan の喫煙する場面に何度も遭遇しているのであれば「反復的現在」と解釈され、また、そうでない場合は、“Juan es fumador. (フアンは喫煙者である)”と等価の「記述的現在」と解釈される可能性があることを指す。
 - 12 Fernández Ramírez (1986:223) は現在形の「夢の用法」として、Buero Vallejo の *Las cartas boca abajo* から次のような文を引用している。“Parece un recuerdo de niño (...) te veo aquí mismo, frente al balcón (...). Yo entro y me llamas. Y dices (...) (それは子供のときの思い出みたいだ。あなたの姿がここ、バルコニーの正面に見える。私が入っていくと、あなたは私を呼ぶ。そして ... という)”この引用例においては“parece un recuerdo de niño (それは子供のときの思い出みたいだ)”という文が、後続する現在形が発話場面で実際に展開する事態に言及していないことを保証している。
 - 13 ここで言う「他の現在形の用法」とは先に見た現在形の「持続的現在」の用法と後述する *presente prospectivo*, *presente actual* の用法を指す。
 - 14 Fernández Ramírez (1986:234) の“perfecto”はいわゆる“pretérito perfecto compuesto (現在完了)”を示す。
 - 15 以下、CREA とある例文は Real Academia Española の Corpus de referencia de español actual からの検索例を指す。また、CREA の後の斜体字は当該例が出現した作品名を示す。
 - 16 例えば、“María dice que José está casado. (マリアはホセが結婚していると言う (言っている))”という文において、話し手が *que José está casado* という従属文を発話できるのは、主語の María が過去に従属文の内容を話し手または他の第三者に話したからである。

- 17 Porto Dapena (1989:50-51) と同じ解釈は Fernández Ramírez (1986:223-232) にも見られる。
- 18 未来形の機能については山村 (2004) を参照されたい。
- 19 例えば、(28) を平叙文から疑問文に換えると、話し手の聞き手に対する命令という意味合いは消える。¿Mañana te levantas temprano y preparas el examen (明日君は早く起きて試験の準備をするのか) ? このことから、「未来の現在」が命令法と置換可能に見えるのは現在形の機能そのものに因るものではないと言える。
- 20 特に (29) は、切迫感のある「未来の現在」と解釈される可能性が高い。
- 21 Cf. Butt & Benjamin (2000), pp.200-202, 230-232. 山田他 (1995), p.304.
- 22 現在進行形の元となる迂言形式 “estar+ 現在分詞” の機能の詳細については、山村 (2000a, 2000b) を参照されたい。
- 23 CREA の検索は、領域は España、かつ、全 medio を対象として行われた。
- 24 このように “¿Qué haces ?” は、発話場面における聞き手の「属性 (記述的情報)」を問うもつとも無標の形式であることから、その応答には「持続的現在」「反復的現在」「未来の現在」の他、様々な表現形式が出現可能である。
- 25 本稿は、時空間の制限を受ける「属性」と時空間の制限を受けない「属性」の違いは、現在形によって表される命題内容に帰せられると考える。例えば、時空間の制限のない “Juan es español. (フアンはスペイン人だ)” と時空間の制限を受ける “Juan está enfermo. (フアンは病気だ)” の違いは、各文の命題に出現したコピュラ動詞 ser と estar の違いということである。

参 考 文 献

- Bello, A. (1981): *Gramática de la lengua castellana destinada al uso de los americanos*, edición crítica por R. Trujillo, Tenerife: Instituto Universitario de Lingüística Andrés Bello.
- Butt, J. & C. Benjamin (2000): *A New Reference Grammar of Modern Spanish*, London: Arnold.
- Fernández Ramírez, S. (1986): *Gramática española 4. El verbo y la oración*, ordenado y completado por I. Bosque, Madrid: Arco/Libros S.A.
- Kratzer, A. (1995): “Stage-level and individual-level predicates as inherent generics”, In G. N. Carlson and F. J. Pelletier (eds.): *The Generic Book*, 125-175, Chicago: Chicago University Press.
- Porto Dapena, J.A. (1989): *Tiempos y formas no personales del verbo*, Madrid: Arco/Libros, S.A.
- Real Academia Española (=GDLE) (1999): *Gramática descriptiva de la lengua española*, dirigido por I. Bosque & V. Demonte, Madrid: Espasa Calpe
- Real Academia Española y Asociación de Academias Americanas (=NGLE) (2009): *Nueva gramática de la lengua española*, Madrid, Espasa Calpe.
- Rojo, G. (1974): “La temporalidad verbal en español”, *Verba* 1, 68-149.
- Vendler, Z. (1967): “Verbs and Times”, *Linguistics in Philosophy*, 97-121, Ithaca NY: Cornell University Press.
- Yamamura, H. (印刷中): “Alternancia de los tiempos verbales en el español oral – con especial atención al verbo “decir” –”, *Lingüística Hispánica* 34.
- 山田善郎他 (1995): 『中級スペイン語文法』, 東京: 白水社.
- 山村ひろみ (2000a): 「estar+gerundio の記述と考察 (上)」『言語文化論究』No.11, 141-163.
- (2000b): 「estar+gerundio の記述と考察 (下)」『独仏文学研究』第50号, 7-28.

- (2004) : 「futuro と pretérito perfecto simple /pretérito imperfecto の関係－機能的対比の観点から－」 *HISPANICA* 48, 31-47.
- (2009) : 「スペイン語の未遂表現－“por poco+ 動詞”と“casi+ 動詞”」 *HISPANICA* No.53, 83-104.
- (2011) : 「スペイン語時制体系再構築のための覚書－NGLEにおける時制の扱い方を踏まえて－」『言語科学』第46号, 75-94.

資 料 体

Real Academia Española: Banco de datos (CREA) [en línea]. *Corpus de referencia del español actual*.
 <<http://www.rae.es>> [検索日：2012年5月1日から6月10日]

¿En qué consiste la simultaneidad del tiempo *presente*?

Hiromi YAMAMURA

Entre los investigadores que estudian la función del tiempo *presente* en español, hay un entendimiento común de que el *presente* denota una situación que tiene relación temporal de simultaneidad con el momento del habla. Sin embargo, como se indica en Fernández Ramírez (1986), la simultaneidad que expresa el *presente* es una ficción en el sentido estricto del tiempo. Además, es bien sabido que el *presente* puede referirse tanto a una situación que ocurrió en el pasado (el *presente histórico*) como a un evento que va a ocurrir en el futuro (el *presente pro futuro*). A pesar de ello el *presente* sigue interpretándose como una forma verbal que tiene la función de expresar la simultaneidad de una situación con el momento del habla.

Este trabajo tiene por objetivo indagar en la función básica del *presente* que comparten los principales usos de la forma verbal con la presuposición de que la “simultaneidad”, que en los estudios anteriores se considera como función primordial del *presente*, debe abarcar las características semánticas que se encuentran comúnmente en todos los usos del *presente*. El resultado se resume como sigue:

- Los principales usos del *presente*, que consisten en el *presente general*, el *presente cíclico*, el *presente histórico*, el *presente perfectivo*, el *presente pro futuro* y el *presente actual*, comparten la característica semántica de presentar la proposición expresada en el *presente* como propiedad (=información como “etiqueta”) del referente relevante que ocupa el espacio-tiempo de la enunciación.
- De lo mencionado arriba, se podría extraer la conclusión de que la “simultaneidad” del *presente* equivale a decir que el referente, al cual presta atención el que habla, posee como su propiedad (=información como “etiqueta”) el contenido de la proposición en cuestión.
- El momento del habla, con el cual tiene relación de “simultaneidad” la proposición expresada en el *presente*, se podría interpretar como una “escena” relevante para el hablante, donde no sólo se desarrolla el acto del habla sino también se encuentra algún referente, que llama la atención del que habla y cuya propiedad (=información como “etiqueta”) se denota con la proposición expresada en el *presente*.